

卒業論文発表会

1月30日, 2008, 福井大学工学部物理工学科

# 一般方向のスピン成分に関する King 問題

物理工学科 杉本宏行

## はじめに

- qubit について

量子情報の最小単位。qubit は  $|\uparrow\rangle$  と  $|\downarrow\rangle$  だけではなく  $|\uparrow\rangle$  と  $|\downarrow\rangle$  の重ね合わせた状態もとることができる。

重ね合わせの状態の例 :  $|\phi\rangle = \alpha|\uparrow\rangle + \beta|\downarrow\rangle$

- エンタングルした状態について

1つめの qubit の測定の結果が2つめの qubit の測定の結果に影響する。  
2つの測定結果が絡み合っている状態のこと。

エンタングルした状態の例 :  $|\Psi\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}(|\uparrow\uparrow\rangle + |\downarrow\downarrow\rangle)$

## King問題について

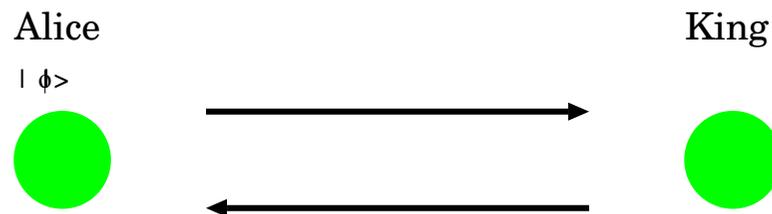
### King問題を考える目的

複数の非可換な物理量のどれか1つを測定した場合、その結果を他の測定の結果から推定することができるのか

⇒ 非可換な物理量の例として直交したスピン  $\sigma_x$ ,  $\sigma_y$ ,  $\sigma_z$  を考えてみる。

## 具体的に

1. Alice は qubit  $|\phi\rangle$  を用意し、King に渡す。
2. King は渡された qubit に対して、 $\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z$  のどれか 1 つの測定をし、Alice に返す。
3. Alice は返ってきた qubit に対して、ある測定をする。
4. King は Alice に自分が測定したスピンの方向を教える。  
(King が  $\sigma_x$  を測定したとすると  $x$  方向)
5. Alice は qubit の状態とどの方向の測定をしたかという情報から King の測定結果が 1 か -1 かを推定する。



## Vaidmanらの方法 (1987)

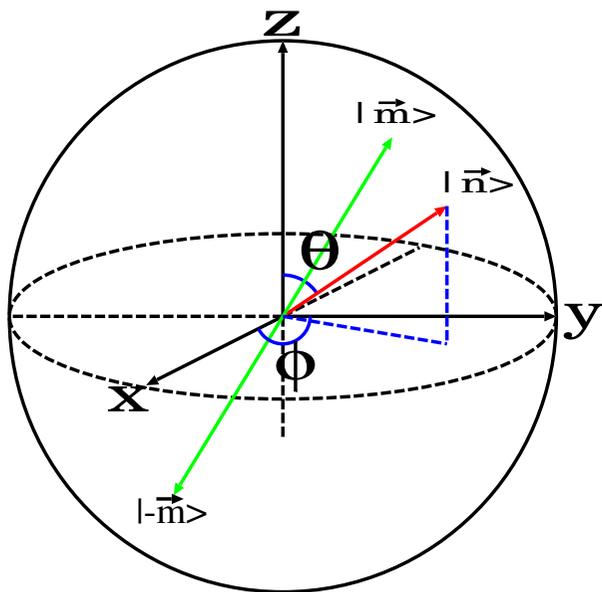
- Aliceが用意する qubit :  $|\Psi\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}(|\uparrow\rangle_{\text{ext}}|\uparrow\rangle + |\downarrow\rangle_{\text{ext}}|\downarrow\rangle)$
- Kingの測定 :  $\sigma_x$  or  $\sigma_y$  or  $\sigma_z$
- 返ってきた qubit と持っていたもう 1 つの qubit との 2 qubit に対する Alice の測定 : ある 4 つの正規直交基底を固有状態に持つ演算子 A

⇒ Alice は King の測定結果を 1 か -1 か 100% 推定できる。

Vaidman らはエンタングルした状態を使えば、直交した  $\sigma_x$ ,  $\sigma_y$ ,  $\sigma_z$  のどれか 1 つを測定した場合の測定結果を他の測定から 100% 正しく推定することができることを示した。

## エンタングルした状態を使わない場合は

- Alice の用意する qubit :  $|\vec{n}\rangle$
- King の測定 :  $\sigma_x$  or  $\sigma_y$  or  $\sigma_z$
- 返ってきた qubit に対する Alice の測定 :  $\{|\vec{m}\rangle, |-\vec{m}\rangle\}$



$$|\vec{n}\rangle = \cos\frac{\theta}{2}|\uparrow\rangle + e^{i\phi}\sin\frac{\theta}{2}|\downarrow\rangle$$

## 測定結果の確率を表にまとめると

		$\sigma_x$	
		1	-1
Alice の 測定結果	1	$\frac{1}{4}(1+n_x)(1+m_x)$	$\frac{1}{4}(1-n_x)(1-m_x)$
	-1	$\frac{1}{4}(1+n_x)(1-m_x)$	$\frac{1}{4}(1-n_x)(1+m_x)$

$\sigma_y$ ,  $\sigma_z$  についても同様に書ける。

**Alice が King の測定結果を 1 か -1 が正しく推定する確率 P は**

$$P = \frac{1}{2} + \frac{1}{12}(|n_x + m_x| + |n_x - m_x| + |n_y + m_y| + |n_y - m_y| + |n_z + m_z| + |n_z - m_z|)$$

となることがわかった。ここで  $n_x, n_y, n_z$  は  $\vec{n}$  の  $x, y, z$  方向成分、 $m_x, m_y, m_z$  は  $\vec{m}$  の  $x, y, z$  方向成分である。

確率  $P$  が最大となる  $\vec{n}$ ,  $\vec{m}$  を求め、最大確率  $P_{\max}$  を求める。

## 結果

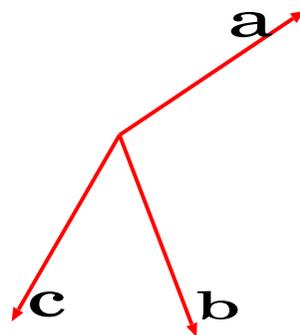
- $|n_x + m_x| + |n_x - m_x| + |n_y + m_y| + |n_y - m_y| + |n_z + m_z| + |n_z - m_z| \leq 2(\sqrt{2} + 1)$
- 例:  $\vec{n} = (\frac{1}{\sqrt{2}}, \frac{1}{\sqrt{2}}, 0)$ ,  $\vec{m} = (0, 0, 1)$
- $P_{\max} = \frac{1}{2} + \frac{1+\sqrt{2}}{6} \doteq 0.90$

エンタングルした状態を使わない場合、正しく推定する確率：約 90%

エンタングルした状態を使う場合、正しく推定する確率：100%

⇒ King の測定が  $\sigma_x$ ,  $\sigma_y$ ,  $\sigma_z$  のどれか 1 つだった場合、  
エンタングルした状態の有効性がわかった。

Kingの測定が直交していない一般の3方向のスピン $\sigma_a, \sigma_b, \sigma_c$ のどれか1つでエンタングルした状態を使わなかった場合と使った場合では



### エンタングルした状態を使わない場合

- Aliceが用意する qubit :  $|\vec{n}\rangle$
- Kingの測定 :  $\sigma_a$  or  $\sigma_b$  or  $\sigma_c$
- 返ってきた qubit に対する Alice の測定 :  $\{|\vec{m}\rangle, |-\vec{m}\rangle\}$

Alice が King の測定結果を 1 か -1 か正しく推定する確率  $P_{1\text{qub}}$  は

$$P_{1\text{qub}} = \frac{1}{2} + \frac{1}{12}(|n_a + m_a| + |n_a - m_a| + |n_b + m_b| + |n_b - m_b| + |n_c + m_c| + |n_c - m_c|)$$

となることがわかった。ここで  $n_a, n_b, n_c$  は  $\vec{n}$  の  $a, b, c$  方向成分、 $m_a, m_b, m_c$  は  $\vec{m}$  の  $a, b, c$  方向成分である。

確率  $P_{1\text{qub}}$  が最大となる  $\vec{n}$ ,  $\vec{m}$  を求め、最大確率  $P_{1\text{qub max}}$  を求める。

## 結果

- $D_{\text{max}} = \max\{|\vec{a} \pm \vec{b}|, |\vec{b} \pm \vec{c}|, |\vec{a} \pm \vec{c}|\}$
- $P_{1\text{qub max}} = \frac{1}{2} + \frac{1}{6}(D_{\text{max}} + 1)$
- 例 :  $D_{\text{max}} = |\vec{a} + \vec{b}|$  ならば  $\vec{n} = \frac{\vec{a} + \vec{b}}{|\vec{a} + \vec{b}|}$ ,  $\vec{m} = \vec{c}$

## エンタングルした状態を使う場合

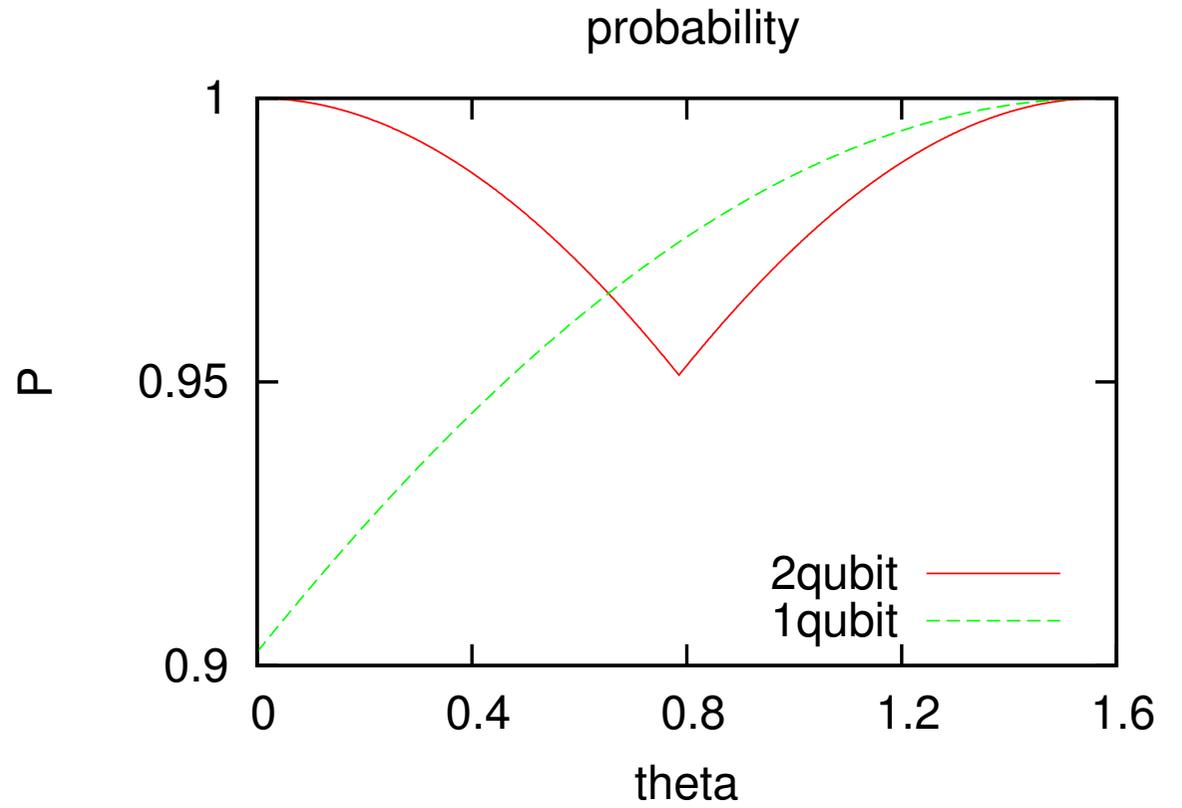
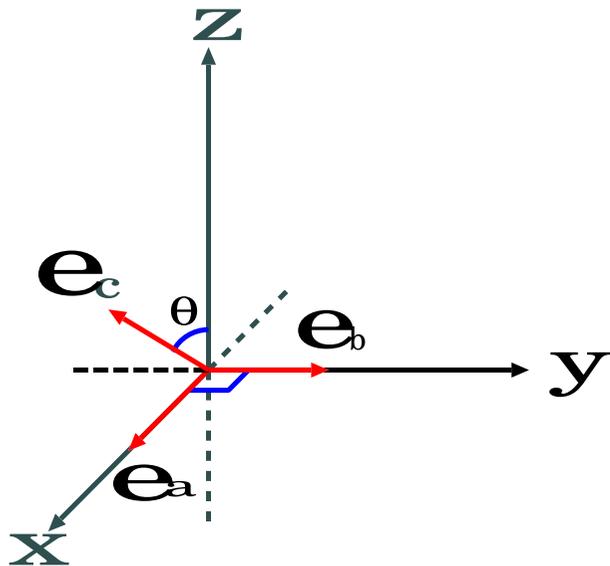
- Alice が用意する qubit :  $|\Psi\rangle$
- King の測定 :  $\sigma_a$  or  $\sigma_b$  or  $\sigma_c$
- 返ってきた qubit と持っていたもう 1 つの qubit との 2 qubit に対する Alice の測定 : 演算子 A

Alice が King の測定結果を 1 か -1 か正しく推定する確率  $P_{2\text{qub}}$  は

$$P_{2\text{qub}} = \frac{1}{2} + \frac{1}{24} (| -a_x + a_y + a_z | + | a_x - a_y + a_z | + | a_x + a_y - a_z | + | a_x + a_y + a_z | \\ + | -b_x + b_y + b_z | + | b_x - b_y + b_z | + | b_x + b_y - b_z | + | b_x + b_y + b_z | \\ + | -c_x + c_y + c_z | + | c_x - c_y + c_z | + | c_x + c_y - c_z | + | c_x + c_y + c_z |)$$

となることがわかった。ここで  $a_x, a_y, a_z$  は  $\vec{a}$  の  $x, y, z$  方向成分、 $b_x, b_y, b_z$  は  $\vec{b}$  の  $x, y, z$  方向成分、 $c_x, c_y, c_z$  は  $\vec{c}$  の  $x, y, z$  方向成分である。

# King が測定するスピンの方向



## まとめ

- King の測定が直交した 3 方向のスピンのもので Alice がエンタングルした状態を使わない場合の正しく推定する確率が求められた。

⇒ King の測定が直交した 3 方向のスピンのもので Alice がエンタングルした状態の有効性がわかる。

- King の測定が直交していない一般の 3 方向のスピンのもので Alice がエンタングルした状態を使う場合と使わない場合の正しく推定する確率が求められた。

⇒ エンタングルした状態を使わない場合の確率が使った場合の確率を上回ることがある。

King の測定が直交していない一般の 3 方向でエンタングルした状態を使う場合、Alice が用意する qubit や Alice の測定をより最適化する必要がある。

## 演算子 A の基底

$$\left\{ \begin{array}{l} |\phi_1\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}|\uparrow\rangle_{\text{ext}}|\uparrow\rangle + \frac{1}{2}(|\uparrow\rangle_{\text{ext}}|\downarrow\rangle e^{i\frac{\pi}{4}} + |\downarrow\rangle_{\text{ext}}|\uparrow\rangle e^{-i\frac{\pi}{4}}) \\ |\phi_2\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}|\uparrow\rangle_{\text{ext}}|\uparrow\rangle - \frac{1}{2}(|\uparrow\rangle_{\text{ext}}|\downarrow\rangle e^{i\frac{\pi}{4}} + |\downarrow\rangle_{\text{ext}}|\uparrow\rangle e^{-i\frac{\pi}{4}}) \\ |\phi_3\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}|\downarrow\rangle_{\text{ext}}|\downarrow\rangle + \frac{1}{2}(|\uparrow\rangle_{\text{ext}}|\downarrow\rangle e^{-i\frac{\pi}{4}} + |\downarrow\rangle_{\text{ext}}|\uparrow\rangle e^{i\frac{\pi}{4}}) \\ |\phi_4\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}|\downarrow\rangle_{\text{ext}}|\downarrow\rangle - \frac{1}{2}(|\uparrow\rangle_{\text{ext}}|\downarrow\rangle e^{-i\frac{\pi}{4}} + |\downarrow\rangle_{\text{ext}}|\uparrow\rangle e^{i\frac{\pi}{4}}) \end{array} \right.$$